

泉久雄先生を偲ぶ

専修大学法学部教授 家永 登

専修大学名誉教授の泉久雄先生が2017年4月29日に亡くなられた。90歳であられた。

先生に最後にお会いしたのは、その丁度2週間前の4月15日だった。毎年先生のお誕生日である4月14日前後の休日に、専修大学で泉先生の教えを受けた門下生たちの集まりである白水会(先生の「泉」という文字から勝本正晃先生が命名されたそうで、高弟の須田唯雄弁護士らが世話人を務めている)が同窓会を開催しており、今年も先生のご自宅近くの鷺沼にある「うかい」という豆腐料理の店に集まった。

たまたま私が到着する直前に、先生が店の玄関に到着されヘルパーさんの手を借りて車椅子に乗り移られたところだった。ヘルパーさんが「それでは2時半にお迎えに来ますからね」といって手を振られたのに、先生がこっくりと頷いておられた。微笑ましい光景を見た思いがした。

去年は椎名規子氏(拓殖大学教授)と一緒に先生をご自宅までお見送りした。ご自宅はマンションの3階にあり、先生はご自宅までの階段を一人で登られた。階段沿いには飾り模様をあしらった柵がついているのだが、「以前は趣味の悪い飾りだと思っていたが、今では手摺り代わりに丁度良いのだ」と仰りながら、その柵に手をかけて一段ずつお一人でゆっくりと登って行かれた。手をお貸ししにくい気魄があった。今年の会合でも、「立居が不自由になったので、家中が手摺りだらけになってしまったよ」と仰りながら、先生独特の調子でハ、ハ、ハッと愉快そうに笑っておられた。

私がお聞きした先生の最後のお言葉は、今年の会合の帰り際の一言だった。先生は専修大学近くの神保町にある大丸屋という古くからの和菓子屋がご最良で、毎年ここの大丸焼きをお土産に下さった。車椅子からヘルパーさんの車に乗り移る段になって、先生は「あの大丸焼きを急いで持ってくるように」と指示された。ヘルパ

ーさんへのお心遣いだった。それが私がお聞きした先生の最後のお声になってしまった。

ここ数年は、以前に比べると先生の舌鋒は穏やかになり、お声も以前よりは弱くなられたが、それでもまさかあの2週間後に亡くなられるとは当日参会しただれも予想しなかったことと思う。たまたま私の叔母は先生と同じ年齢で、しかも同じ東北大学法文学部の卒業で、以前先生から片平丁のキャンパスで会ったことがあるとお聞きしていた。その叔母が今年の3月末に89歳にして運転免許の更新にパスしたばかりだったので、「同期生の叔母も元気にしているの、先生もお元気で」とスピーチしたのだが、かなわなかった。思い返すと、今年の会合では有斐閣の大橋祥次郎氏をお招きになり、今年も同じく有斐閣の稼勢政夫氏をお招きになるなど、先生ご自身にはすでに「一期一会」のお気持ちがおありだったのかも知れないと今にして思う。

先生は、専修大学ご退職後に、「ライフワークとしてマリアンネ・ウェーバーの婚姻論を翻訳したいと思っている、五十嵐清先生が翻訳されるというお話を聞いたけれども、彼が訳さないのなら私が訳したい」と語っておられた。五十嵐先生もすでになく、泉先生も亡くなられてしまい、この訳業が日の目を見ることはなくなってしまったが、泉先生は白水会の会合の際にその抄訳を私家版（白水会世話人の森龍夫氏が作製された）として参会者に配布された。泉先生は、マリアンネ・ウェーバー的な婚姻を实践された方であるとひそかに思っている。奥様をご自宅で介護され、看取られ、ご自身もご自宅でお一人でこつ然と亡くなられた。

今ごろ先生は先に亡くなられた奥様や中川善之助先生ご夫妻たちと楽しく再会しておられることだろう。先生、お疲れ様でした。どうぞ安らかにお眠り下さい。

(2017年5月10日)